

Title	对象的思惟とゲーテの古典主義的芸術観の成立
Sub Title	Das gegenstandliche Denken und die klassizistische Kunstanschauung Goethes
Author	高橋, 巖(Takahashi, Iwao)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1961
Jtitle	哲學 No.40 (1961. 10) ,p.47- 67
JaLC DOI	
Abstract	Wenn man heute Goethes Weltanschauung als eine heutiger Wissenschaften würdige Einstellung geltend machen wollte, was ubrigens dem Verfasser als sein brennendes Problem gilt, so musse es doch vorzuglich auf die richtige Beurteilung der Goetheschen Denkweise als solcher ankommen, die treffend J. Ch. A. Heinroth "gegenstandliches Denken" nannte. Aus diesem Grunde wird in dem Aufsatz die Entstehung der objektivistischen Kunstanschauung bei Goethe, die wunderbarster Weise vorging, als Goethe sich in Italien befand und in Natur und Kunst dasselbe Gesetz entdeckte, in Bezug auf dieses gegenstandliche Denken nachgefarscht. Um die Bedeutung dieses Denkens noch klarer zu machen, wird dabei auch ein wesentlicher Unterschied dieser Kunstanschauung von der Lehre "asthetischer Idee" berührt, welche fur die Asthetik des deutschen Idealismus seit Schelling eine so bedeutende Rolle spielt.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000040-0047">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000040-0047</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 对象的思惟とゲーテの古典主義的芸術觀の成立

高 橋 巖

ゲーテはつねに概念的思惟の示す道のみを歩むことに、用心深い、ほとんど懷疑的な態度をとっている。「私は哲学に対してつねに自由な態度をとりつづけてきた。健全な常識の立場は私の立場でもあつた」、と一八二九年二月四日の「エッケルマンとの対語」は語つてゐるが、一層端的に、「本来の意味における哲学のために私はなんら器官をもたなかつた」<sup>(註1)</sup>とさえ彼は書いたことがある。ゲーテのこの「現実主義」、「經驗主義」(彼は自己の立場をしばしばそう名づけた)<sup>(註2)</sup>に、ショーペンハウアーもまた、ゲーテを観念論哲学に近づけようと試みた際、出会つてゐる。「このゲーテはまつたくレアリストであつて、客觀そのものが認識する主觀によつて表象されるかぎりにおいてのみ存在する、ということとは、彼には思いもかけぬことであつた。何ですつて！ と彼はジュピターのようなまなざしを私に向けながらいつた。光はあなたがそれを見るかぎりにおいてのみ存在するといふのですか。いやそんなことはありませぬ。もし光があなたを見なければ、あなたは存在しないでしよう」<sup>(註3)</sup>ゲーテとシラーの間にかわされた有名な会話も彼のこの態度を典型的に示している。或る自然科学の学会からの帰途、——それはまだ彼らに親しい關係の生れる前のことだつたが——二人は自然科学の方法について論じ合つたことがあつた。ゲーテはその折、シラーに彼が象徴的植物と呼んだものについて語り、かつそれを描いて見せたが、ゲーテ自身このときの模様を後に次のように回想して

いる。「シラーは大きな関心と決定的把握力とをもつて、すべてを傾聴し注視した。しかし私が語りおわつたとき、彼は首をふつていつた。それは経験ではありません、イデーです、と。」ゲーテはこれに答えて、私がそれとは知らずしてイデーをもち、あまつさえそれを眼をもつて見ていたとは大変うれしいことです、といつたのである。<sup>(註4)</sup>

これらにみられるゲーテの態度、すなわち眼、*Anschauen* に対する信頼と抽象的思惟に対する不信とはしばしば、われわれの問題にとつても無視できぬ皮相なゲーテ解釈を生んでいる。以下にそれに関する二つの典型的な例をあげてみたい。

ゲオルク・ジンメルはゲーテの認識の態度を、カントが学的であるに対して、芸術的であると規定して次のように説明している。「ゲーテは『鳥のように歌う』が、その云いあらわしは臆面のない自然主義となることはなかつた。なぜならその云いあらわしは、丁度学的認識がはじめから一定の悟性範疇によつて形づくられているように、はじめから、そもそもその源から芸術形式を形づくつていたから。」「彼の表象作用がすでに芸術的であつた。」「ゲーテの世界観の決定的な、彼をカントから絶対に区別する根本特徴は、主観的原理と客観的原理との、自然と精神との統一を彼が現象そのものうちに求めるところにある。」「芸術家にとつて自然ははじめからレアルなものとイデアールなものとの統一を意味している。ゲーテが『理念を眼で見る』とき、それはとりもなおさず、彼にとつて事物の価値と完成態とが——これはわれわれ他のものにとつて多少とも空想的形成物としてのみ事物の上に浮動して見えるにすぎないが——、彼の見得たような現実態のうちに存したことを示す。<sup>(註5)</sup>」

以上の引用に見られるジンメルの解釈はゲーテの立場を正確に伝えるものではない。ゲーテにとつて現象は決してはじめからレアルなものとイデアールなものとの統一を意味していない。むしろ後に述べるように或る独自の形象

的な表象活動が究極においてこの統一に達しうることを主張するのである。「あらゆるものの中でもつとも困難なものは何であるか。それは汝にとつてもつとも容易に思われるもの、すなわち眼をもつて汝の眼前に存するところのものを<sup>(註6)</sup>見ることである。」なぜならばわれわれは対象をば「精神のうち<sup>(註6)</sup>にふたたび作り出すことができる<sup>(註7)</sup>とき、はじめこれを本来の意味において、より高い意味において *anschauen* しているということが<sup>(註7)</sup>できる」からである。ゲートにとつても単なる対象の知覚から最高の認識——これを後にのべる理由から芸術的形式における認識と呼ぶことは可能である——までの過程は無限に長い道を意味するのであつて、その認識の成果を表現するに際して、ゲートが天才的芸術家として生得的にもつていた芸術的形式のうちに「鳥のように歌つた」と解釈することは、このゲートの道の長さ、きびしさを無視する点で適當ではないであろう。

第二にわれわれはフリッツ・シュトリヒの解釈を例にとりたい。彼は古典主義と浪漫主義との比較論において、ゲートが前者にとつて必然的な諦観 (*Entsagung*) にもとずき、無制限な認識衝動をもとうとしなかつたことを強調している。「ゲートが眼を信頼していたことは限りないものであつて、……たとえ眼が照らしてくれる事物の背後になんものかがあろうとも、それを認識することは彼の衝動にはなかつた。」「自己の内的要求が外的世界の要求し充足するもの以上を求めないということが、ゲートの『幸福』となつてゐる。」「したがつて、「経験というこの感覚の欺瞞は真理衝動に永遠の制限をおく」とする「カントですら、ゲートにとつては人間性の限界を持するという彼自身の法則を<sup>(註8)</sup>確かめてくれたにすぎず、」「カントはゲートにとつてもシラーにとつてと同様福音の伝来者たるにすぎなかつた」。

たしかにシュトリヒのいうように、ゲートは認識能力に超えがたい限界のあることを認めていたが、以上のシュトリヒの解釈の方向もまたまつたく非ゲートのであるといえよう。ゲートは人間の認識活動一般に一定の限界線をひく

ことを嫌つていた。なぜならば各人間にとつて、それぞれの能力の段階に依じて、この限界の範囲に非常な相違のあること、同一の人間においても努力次第ではこの範囲を拡張できることを確信していたからである。人は「人間精神が人間と世界との秘密の中へどれ程深くかつ広く押入ることができかを決して断定することができない」のみならず、カントのひいた認識の「この限界線を知るかしこい者は *zugänglich* なものの中にとどまつている」べきかも知らぬが、「彼がこの領域内をあらゆる方向に向つて進み、しかも確実な態度を持しているならば、*unzugänglich* なものから何事かをかちとることさえできるのである。」<sup>(註10)</sup>

この、感性的直観と悟性的認識とにとつて *unzugänglich* なものから何事かを獲得するために、ゲートは独自の方法を所有していた。彼は「悟性の近づきえぬ固有の法則をもつ」<sup>(註11)</sup> ファンタジーの力、構想力が認識行為に際しても、概念的思惟と並んで不可欠の要素であることを確信していたのである。「ファンタジーはわれわれの精神的本性の第四の主要力である。それは記憶の形式において感性を補足し、経験の形式において悟性に世界に観を呈供し、理性諸理念のために諸形姿 (*Gestalten*) を見出し、かくして全的人間統一性を活気づけて、それが索莫たる不活潑におちいるのを防ぐ。」<sup>(註12)</sup> 「他方ファンタジーはこれら三つの愛する兄弟達の助けをかりてはじめて真理と *Wirklichkeit* の領域に導かれる。感性は彼女に明確に輪郭づけられた諸形姿を与え、悟性は彼女の生産力を規制し、理性は彼女が夢幻的形象をもつてたわむれず確実に諸理念に基かしめる。」<sup>(註13)</sup> ゲートはさらに、クネーベル宛書留の一つで、三つの構想力を区別し、(一)対象を単に再現するにすぎぬ模像的構想力、(二)把握したものを靈活、発展、拡張、変化させる生産的構想力、(三)「決定的であることを確証するために、現出する際周囲を顧慮し、同じもの、類似のものを見つけだすところの『慎重な構想力』 (*umsichtige Einbildungskraft*)」<sup>(註13)</sup> としている。何か決定的なことを述べるときに日常的表

現を用いるのはゲーテの常であるが、ここでさりげなく定義づけられている第三の構想力に彼が特別な意義を附与していることは明かである。

客観的でありつづけるために慎重な態度をとるこの第三の構想力を、一種の思惟であると規定したのは、当時の心理学者 G. Ch. A. ハイน์ロートであつた。彼はこれに「对象的思惟」という名を与えて次のように説明した。――

「ゲーテ的思惟の特徴は彼が *Anschauen* と思惟とを全然区別しない点にある。 *Anschauung* に充たされた思惟のみを彼はまつたき価値をもつものとした。彼にとつて思惟はなんら存在に對立する審級ではなく、存在の中に埋没されているのである。<sup>(註14)</sup>」ゲーテの論文 “*Bedeutende Fördernis durch ein einziges geistreiches Wort, 1823*” を読むと彼がこの言葉を非常に喜びかつこれによつて非常に力づけられたことがわかる。――「ハイน์ロート博士はその著人類学において私の本質と作用とについて好意をもつて語つてゐる。それどころか、彼は私の態度を独自の態度であるとのべてゐる。すなわち私の思惟能力は对象的に働くというのである。これをもつて彼のいわんとするところは、私の思惟が対象から切り離されぬこと、対象の諸要素、諸観照は思惟の中へ入つていき、思惟によつて極めて密接に浸透されていること、私の観照そのものが一つの思惟であり、私の思惟が一つの観照であることである。<sup>(註15)</sup>」一八二三年十二月二日附ボァスレー宛書簡にも彼はこのハイน์ロートの言葉にふれている。

今引用した論文の中でゲーテは、对象的思惟が初期から晩年にいたる彼の全表象生活の主要源泉であつたことをも述べてゐる。事実ゲーテが発展の各時期に用いた *Schauen, Anschauen, Irradation, Anschauende Kenntnis, Anschauender Begriff, Anschauendes Denken, Anschauende Urteilskraft, Scientia intuitiva* 等の諸概念は皆このゲーテ独自の思惟方式を指すものといふことができよう。<sup>(註16)</sup> かくしてゲーテにおけるこの思惟のもつ意義は極めて明か

であるにもかかわらず、最近までこれに対する認識批判的・自然科学的あるいは芸術論的観点からの検討は、かならずしも十分とはいえなかつたのではないであろうか。エドアルト・マイは一九四九年この点に関連して、ゲーテの自然研究上の方法的・認識論的研究がまだはじまつたばかりであることを強調している。<sup>(註17)</sup> またすでにデイルタイも「体験と文学」の中でこのゲーテ的思惟の構造に注意を向けているが、その際彼は、ゲーテの独自の思惟によつて「当時はてしない論争のうちに哲学者たちの心を領していた或る認識の可能性に関する謎が彼にとつて解決した」と述べるにとどまり、この思惟の客観性、普遍妥当性に関する検討を行おうとはしなかつた。

従来この面のゲーテ研究があまり注意をはらわれなかつたのはなぜであろうか。ゲーテは対象的思惟をささえる彼のファンタジーのもつとも基本的なあらわれ方を次のように述べたことがある。——「私には一種の能力があつて、目を閉じ頭を垂れて視覚器官の中に一つの花を思い浮かべると、いつもその花は一瞬間も最初の姿にはとどまらず、ばらばらになつて、その中から、多彩な花卉やあるいはまた緑色の花卉から或る新しい花が、ふたたび開いてくるのだつた。それは自然の花ではなくて空想の花だが、しかし彫刻家の薔薇形の装飾のように規則正しい花だつた。このようにどんだん芽を吹き出す創造物をとどめておくことは不可能だつたが、そのかわりそれは私の望み次第いつまでも持続し、弱まることも強まることもなかつた。」<sup>(註19)</sup> このようなイマジナティーフな内的形象の変化を生ぜしめる心的活動は、ゲーテのような人物のみならず、もしそれが意識的・積極的に訓練されるならば、何人のうちにも見出すことのできるものであろう。しかしこの、カントならば「心性の欠くべからざるしかし盲目的な機能」<sup>(註20)</sup> というであろうところのものが非概念的な一種の思惟の可能性をもつか否か、この形象の変化が一定の固有のそして普遍妥当的な法則に支配された認識の手段となりうるか否か、——ちなみにここにゲーテをカントから区別するもつとも本質的な

問題点が存するのであるが——、この点に普通ひとはめつたに注意しないものである。それはこのような訓練の機会が、殊に現代のような生活形態においては、めつたに与えられておらず、したがって各人の中にあるこのような能力は未発達な段階を出ることが少いたためであろうか。もし静かな晩にでも、ゲーテのこの花のごとき形象を心の中にできただけ明瞭にしかも持続的に表象し、あるいは変化させる試みをしてみるならば、抽象的思惟のみ発達した多くの現代人にはこのことが明かになるであろう。そして高度に発達したこの表象能力の所有者としてのゲーテの天才性にあらためて驚嘆せざるをえないであろう。

さて対象的思惟を考察する際忘れてならぬことは、思惟の対象が主観にとつてなんらかの *Bedeutung* (ゲーテは特に晩年 “*bedeutend*” を *prägnant* と同義に用いている) をもつときにのみこの思惟活動が行われるということである。「そこから多くのものが導き出されるところの、あるいはそれが多くのものを自ら自由に生み出し、私に対して *entgegentragen* するところの」一つの *prägnant* な点が見出されるまで、私は休まない。……もしなにもものも導き出すこと (*Ableiten*) のできぬ現象が経験の中に入ってくるならば、私はこれを問題として残しておくが、このやり方は私の長い生涯において非常に有益だった。なぜなら私になんらかの現象の由来と結びつき (*Verknüpfung*) を長い間知ることができずに残しておかねばならぬとき、数年後に一度にすべてがこの上もなく美しい関連をもつて明かになったから。<sup>(註21)</sup> 対象の中に「導き出すことのできぬもの」が存在することは、その対象の法則性が主観にとつてまだ *bedeutend* でないことを意味するから、その限りにおいて、人はこの対象について対象的に思惟することはできない。対象の法則性と主観の内部におけるファンタジーの法則性との融合、共鳴が常にこの思惟の前提をなしている。したがって一つの対象の本質が対象的思惟によつて把握されたときには、人々はこの対象と自己との内的関連

を、「愛」をもつて感じることが出来る。ゲーテはこのことを端的に、「精神とイデーとはただ愛するものにのみ開示される」と述べているが、この言葉は恣意的あるいは功利主義的なものと解釈されるべきではない。愛はこの思惟の目的ではなく結果なのである。ところでいかなる対象が主観にとつて *bedeutend* であるかは各人によつて異なるから、この思惟は各人にとつて独自のしかし必然的な仕方で行われる。「各人は自らの仕方と思惟せねばならぬ。なぜなら彼は常に彼の道の上で真なるもの、あるいは生涯彼を助けてくれる一種の真なるものを見出すからである」「散文の箴言」さらに人はこの思惟によつて自己の個性の認識にも到達することが出来る。というよりは、「人は世界を知る限りにおいてのみ自己自身をも知る。そしてこの世界を人は自らのうちにおいてのみ認め、自らをこの世界においてのみ認める」<sup>(註22)</sup>のである。それ故ゲーテにとつて「汝自身を知れ、という偉大な *bedeutend* に響く課題はひそかに結託して人間を到達されえぬ要求によつて惑わし、外界への活動から内面の偽りの静観へと誘なうところの僧侶達の奸計のように思われた」<sup>(註22)</sup>のである。

かくして今やゲーテは或る非常に注目すべき確信に到達した。すなわち彼は、一般に現象界のすべての事物の變化、発展とファンタジーのそれとの中には同一の法則性が働いている、ということを確認したのである。人間の内部には対象的思惟という一つの舞台があるのであつて、ここで事物は、単なる *Anblick* (ゲーテはこれを *Anschauen* と区別している) に際しては見ることできぬ *ideell* な内部をあらわす。したがつてその際人間が事物について語るといふよりは、自然が人間の中で自分自身について語つているのである。人間もまた一つの自然であるといふ確信を通して、ゲーテは彼の内部の *ideell* な言葉の中に事物の *Ansich* が語る声さえきく。この声を明瞭にききとるために彼は長い困難な努力をつづけた。そしてあのイタリー旅行によつて或る決定的な段階に到達したのである。

ゲーテはすでにそれ以前にもヴァイマルで、この確信を保証し強化してくれるものを実に烈しく求めつづけて来たが、容易に得ることができず、周囲の者達もまたこのような彼の努力を理解しなかつた。「哲学」の研究もまたこの意味ではなにも本質的寄与をもたらさなかつた。「先天的認識も先天的綜合判断も私の氣に入つた。なぜなら私は生涯を通じて詩作し、観察しつづ、綜合的にそしてまた分析的に行動してきたから。人間精神の *Systole* と *Diastole* は私にとつて、第二の呼吸のごとく、たえず鼓動しつづけながら決して分離することがなかつた。……さて今はじめて私に一つの理論がほほえみかけてくれるように見えた。その入口は私の氣に入つた。しかしその迷路そのものへは入つていく気がしなかつた。文学的志向か常識かがそうすることを妨げたのである。そして私は決して改善された自己を感じなかつた。」<sup>(註23)</sup>と彼はカント哲学について語っている。この言葉の中にはゲーテのイタリー旅行以前の充たされぬ氣分がよくあらわれている。だからシラーが彼に手紙を送つて、「あなたは自然の必然性を、力の弱い者達なら避けて通るであろうような、もつとも困難な道の上で探求していらつしやいます。……あなたがギリシヤ人かイタリー人として生れ、揺籃の頃から風光明媚な自然と理想的な芸術とにとりまかれていましたら、あなたの道は無限に短縮されたことでしょう。」<sup>(註24)</sup>と述べたとき、彼はゲーテの本質を実に正しく捉えたのである。

明確な輪郭をもつ自然と理想的な芸術とにかこまれて、イタリーでゲーテはこのもつとも困難な道を決定的に歩むことができた。ここでは「新しい諸対象は、われわれの精神を刺戟しつづ、いちぢるしい多様性のうちに、(ドイツでは不可能だつた)純粹な熱狂をもつことのできることをわれわれに教えてくれる。それらの対象はより高きものを示唆していたが、その高みに達することをわれわれに許してくれるように見えた。」<sup>(註25)</sup>彼が個々の場合にこの道をいか

に歩んだかについて、ここで述べる余裕はないが、それについて、たとえば「ドレスデンのもう一人のゲーテ」、G・

カールスの「ゲーテ論」<sup>(註26)</sup>に卓越した叙述がある。ゲーテ自身も、芸術、自然、人間生活の三つの場合を、「自然の単純な模倣、マニール、様式」と「植物のメタモルフォーゼ」と「ローマの謝肉祭」の中で示している。

ともあれゲーテはイタリーで個々の事物の永遠の変化、生成の中に沈潜しつつ、遂に不変の *Urbild* を見ることを学んだのである。彼は *Urpflanze* において実際にこれを見た<sup>(註27)</sup>と信じた。勿論そのためには、“*Anschauende Urteilstraft, 1817*”が述べているようなより高い観照方式、いわば精神の眼が必要であつたが、このような観照方式は、芸術家のみならず、自然研究に志すものにとつても、必要であると彼は考えざるをえなかつた。もし人が、このような立場は普通の自然科学の立場と大差はない、後者も変化する経験界の諸事象の中から普遍的に妥当する法則を見出そうとするのであるから、と考えるならば、はじめに述べたあのシラーの立場に立つことになるであろう。しかしゲーテと当時のシラーとの、この微妙なしかし決定的な相違を理解しなければ、ゲーテの本質は理解できないであろう。このことを理解するためにあの会話の少し後に、同じシラーがゲーテに宛てた書簡（先に引用したのと同じ書簡）の一節が有力な手がかりを与えてくれるであろう。「あなたは全自然を総覧して個々のものを明かになさいます。自然の現象の仕方の全体性の中に個体のための説明根拠を求めています。単純な組織から一步一步より複雑な組織へと高まり、遂にはあらゆるものうちもつとも複雑な組織、すなわち人間をば発生的に全自然構成の材料から建設しようとなさいます。あなたは人間をいわば自然に従つて追創造することに、人間のかくされた技術の中へ押入るのです。これは偉大な真に英雄的なイデーです。」この「追創造」の中に、永遠の変転から不変なものへ向う際のゲーテ的方法の本質がある。即ちゲーテの *Urbild*, イデーは出来上つたものの中には十分看取されない。われわれは生成の中にまでさかのぼり、創造行為そのものを体験しなければならぬ。「もしわれわれが道徳的なものの中に、神、

徳、不死への信仰を通して、高次の領域へ高まり、第一存在へ近づくべきならば、同様のことが知的なものの中に行われてもよいであろう。すなわちわれわれが常に創造する、自然の観照を通して自然の生産に精神的参加をするに自らをふさわしくする、<sup>(註28)</sup>ということがある。」ゲーテの *Urbild*、イデーとは現象の背後にかくされた唯一の創造力を意味する。そしてファンタジーの力のみがこれを体験することができるのである。

このことを考えるとき、ゲーテの生における芸術のもつ独自の意義が明かとなる。けだしすぐれた芸術はいかなる自然の諸現象におけるよりも完全な姿でこの創造力がその表面にあらわれており、人はそれを通してその生成の過程をもつとも徹底して追体験することができからである。対象的思想は芸術作品の中にそのもつともふさわしい領域を見出す。「高次の *Kunstwerk* は同時に真にして自然な法則によつて、人間最高の *Naturwerk* として作られている。すべて恣意的な空想的なものは失われる。ここには必然性があり神がある。」<sup>(註29)</sup>自然の法則は同じ一個の自然である人間の精神の中にも生きている。したがつて人間精神によつて必然的に創造された芸術作品もまた一個の *Naturwerk* である筈である。もし芸術家がギリシャ人の意味で、つまり自然自身がとると同じ態度で、同じ法則に則つて創造を行うならば、その作品の中には自然の中に見出さるべき神性が存するであろう。「美とは、それなくしては永遠にかくされているところの秘められた自然法則の顕現である。」(格言と反省)そして「自然がその啓示的秘密をうちあけはじめると、人はそのもつともふさわしい解釈者、芸術へのおさえがたい憧れを感じる。」(格言と反省)かくしてここに極めて興味ある芸術観が成立した。われわれはこの芸術観を端的に示している二つの論文をもつていいる。一つはカール・フィリップ・モーリッツがローマでこれについてゲーテと論じ合い、それにもとづいて発表した「美の造形的模倣について」<sup>(註30)</sup>であり、他は「自然の単純なる模倣、マニール、様式」である。

モーリッツによれば、真の芸術家の課題は、概念的思惟の及ばぬ *natura naturans* の秘密、「自然という偉大なあらゆる調和的諸関連の統一性」（すなわち美の本性）を、たとえ臆気な予感としてであれ、把握することにあるが、この統一性は対象の *Was* ではなく *Wie* としてのみ現われることができ、彼はこれを構想力の対象の中にではなく、その形成過程における活動力の突如とした実感の中に、自然と自己との活動力のアナロジーとしてのみ捉えることができる。「人間の表象力が包括しえぬ全体の、調和的構造における最高の美に対する感覚は直接活動力そのものうちに存している」<sup>(註31)</sup>。かくして把握されたものは芸術創造において作品の中に再現されることができ、したがって芸術作品の中には「いわば自然の中に大規模に存しているあらゆる関係の究極の諸点が小規模に」存しているが、それはふたたび *Wie* として、それゆえ内容ではなくしてその形成の仕方、形式の中にのみ再現される。一切の自然現象は、——この中にわれわれはわれわれの内的形象をも加えることができよう——、その現れ方次第で美をもつことができる。しかしつねに全体にのみ注意する自然は個々の事物の完全な生成発展には意を用いぬため、自然の単なる断片には完全な美は存在せず、またそれを単に模倣するところには純粹の芸術は存在しない。完全なる自然の法則性は個々の自然の事物ではなく、芸術作品の中のみ実現されうるのである。

かくしてイタリトでモーリッツは芸術の独自の、他のなにものによつても代用されえぬ意義を基礎づけることができた。それは第一に芸術が自然のプロセスを象徴するものであり、これとの類比を通して、芸術創作、芸術鑑賞は自然の秘密にふれることができ、これを体験することができること、第二にこの体験は美的体験を意味するのであつたが、同時にこの行為は、自然の真実に迫る行為であるが故に、真に仕える行為ともいえる、ということに基いている。かくしてここに美と真、芸術と科学が同一の基礎の上におかれることができた。

ゲーテはこの芸術と真との関係をさらに「自然の単純な模倣、マニール、様式」<sup>(註33)</sup>において別の面から論じている。この題名が示すように、ここでゲーテは三つの創作態度を区別しているが、「有能ではあるが制限された本性の者が感じはいいが制限された対象を取扱う」に適した「自然の単純な模倣」や、自己独自の言葉、仕方を工夫し、自己の感情と対象との関係に特に注意する「マニール」に対して、自然を深く研究し、事物の本性を把握して、異なる特徴的な諸形姿を広く見通しかつ比較できるようになつてはじめて到達できるところの「様式」の段階を最高の段階と考へている。「単純な模倣が事物の落着いた *Dasein* と愛すべきその現存とに基づき、マニールが現象を軽快有能なゲミニットをもつて把握するとするならば、様式は認識のもつとも深い根底、事物の本質に基づいている。」<sup>(註34)</sup>ゲーテはこの論文の後半でこの三者が互に互に有機的に結びついているかを強調しているが、われわれの問題にとつて重要なのは、彼が、快、不快の観点を決して芸術にとつて本来的なものとは見做さず、むしろ高次の芸術的観点を獲得するためには、日常意識される感情の要素を否定する必要があると考へている点である。ゲーテは晩年にもクネーベルに、「自分は不滅の神のような生き方をしている。すなわち喜びも悲しみもはやない、」<sup>(註35)</sup>と語つたことがあるが、イタリー旅行後まもなく書かれた或る論文の冒頭の一節はこのことをもつとも端的に示しているであろう。——「人間は自己の周囲に対象を認めるや否や、自己との関係においてそれを見る。それは正当なことだ。なぜならその対象が彼の氣に入るか否か、彼を惹きつけるか否か、彼にとつて有益であるか否か、は彼の全運命と結びついているのだから。事物を見、そして判断する場合のこの極めて自然なやり方は、むづかしいことではないが、必要なことである。けれどもこれによつて彼は無数の、彼をしばしば傷つけ、その人生を辛いものにする誤謬にさらされることにもなるであろう。一方知識への生き生きとした衝動が、自然の諸対象をば、そのものとして考察するか、あるいはまたその

諸対象相互の結びつき方に特に注意をしようと努めるものは、もつとはるかに困難な日々の仕事を行うことになる。なぜなら、事物を自己との関係において考察する場合、そういう人は助けとなるべき規準をもたないからである。そういう人には、快、不快、牽引と反撥、利益と損害という種類の規準が欠けている。彼らはかかる規準をもつことをあきらめねばならない。彼らは、快いものも快くないものも、等しいいわば神的な *Wesen* として求め、探求しなければならぬ。このようにして真の植物学者は一つの植物の美しさや有用性の問題にふれることなく、他の植物との関係、その成長過程等を探究せねばならぬ、そしてそれらすべてが、如何に太陽によつてよび覺され、照らし出されるかを、いわば平等なしづかな眼で観察し、認識の規準、判断のデータを自己からではなくして、ものの側からとり出さねばならぬ<sup>(註36)</sup>」。

対象的思惟における重心が感情の主観性ではなく、むしろ思惟、観照の客観性におかれることによつて、ゲーテの芸術論もまたいわゆるレアリズムからはるかに隔たつたところに別の客観主義の立場を打立てることができたが、この立場にもとずいて、最後に芸術はゲーテによつて殆んど宗教的な課題を担うことになつた。すなわち、自然は、すでに述べたごとく、常に全体にのみ意をはらい、個々のものは偶然性のもとに不完全のままに放置され、自己の全的發展を妨げられている。しかし自然は人間を創造することにより自己の最高の作品、自己の一頂点を生み出したのである。それゆえ人間は最高の自然として、阻止されぬ全的に發展されたものを再創造すべき委託を自然から受けている。——「人間は自然の頂点におかれているので、自分をふたたび一つの全自然と見做し、自らのうちにもう一度一つの頂点を生み出さねばならない。人間はあらゆる完全性と徳とをもつて充たされ、選択、秩序、調和、*Bedeutung* を召喚し、最後に芸術作品の生産にまで自己を高めつつ、この頂点に向つて昇つていく。もしもひとたびこの作品が

完成されるや、……それは持続的な作用を、最高の作用をひきおこす。なぜならばこの作品は全諸力から精神的に発展しつつ、すべての輝かしい、尊敬と愛とに価するものを身につけ、……人間を人間以上に高め、……過去と未来が生きておられる現在のために人間を神化するのである。」<sup>(註37)</sup>かかる創造行為において、「もしも人間の健全な本性が一つの全体として働き、世界が大きく美しく価値ある全体と感ぜられ、調和的愉快が彼に純粋な自由な恍惚を与えるならば、その時は、宇宙は、もし自己を感じえるなら、目標に達したと歓声をあげ、自己の生成と存在とのこの頂点を讚嘆するであろう。」<sup>(註38)</sup>

ゲーテの芸術観そのものを追究する試みにおいては、「ゲーテの芸術論の中心範疇」たるシンボルの概念を逸することはできない。しかしわれわれのテーマがゲーテの思惟方法との関連において彼の芸術観の成立を扱うものであるとすれば、この、それ自身独立した研究対象としてえらぶにふさわしい概念については機会をあらためて論じることが許されるであろう。

最後にわれわれは以上の探究の附録として、ゲーテの芸術観に関して若干の美学的反省を加えておきたい。というのは、ゲーテの時代は観念論美学の全盛期でもあつた。そしてこの美学の内容とゲーテのイデアールなものとレアールなものに関する上述の立場との間には少からぬ関係があると思われる。「私はあなたを、現代において到達された人間性の段階における感情のもつとも純粋な精神性の代表者として観察しており、また常に観察しつづけてきました。哲学があなたに頼るのは正当なことです。あなたの感情は哲学の試金石です。」という、「全知識学の基礎」とともにゲーテに送ったフィヒテの書簡の一節は美学に関してより一層妥当するであろう。それにも拘らず、この美学に

とつて最重要の概念である「イデー」の把握に際して一つの本質的な、決定的な相違が両者の間に生じている。ヘーゲルは美を「イデーの感覚的なあらわれ」<sup>(註39)</sup>であるとし、「芸術の内容はイデーであり、その形式は感覚的・形象的形成である」<sup>(註40)</sup>としている。したがつて、哲学において学的思惟のための言語にあたるものが芸術における感覚的・形象的なるものであつて、両者ともに同じイデーを表現すべきなのである。しかるにゲーテにあつてはむしろ哲学にとつてイデーにあたるものが芸術にとつて形象そのものである。より正確にいえば、形象の形成過程なのであつて、その形成過程の必然性を体験する時のみ、人は他のいかなる機会にもちえぬ *Daseinsweise* を知ることができ、ここに芸術以外のいかなる領域においても純粹には存在しない芸術独自の意義がある。芸術においてはイデーは内容ではありえず、或る内容のイデアールな形式という意味においてしか存在しないのである。この比較の観点に立つとき、美的イデーの説は、シェリングから現象学派のメッカウアーにいたるまで、ゲーテの立場と、同じ客観主義的立場をとりながらも、鋭い対立をなしていることがわかる。この対立の一つの典型的な例として、メッカウアーの「対象的代表作用」(*gegenständliche Vertretung*) という概念をあげることができよう。メッカウアーによれば「芸術とは美的イデーの感覚的表出」<sup>(註41)</sup>なのであるが、「一般に感性的対象すなわち芸術品が非感性的なイデーをいかにして代表し、かつかにしかしてかかる代表作用の可能性によつて、根底に存する美的イデーの表象をよびおこしうるか」という問題に際してこの概念を用いて説明する。すなわち、リップスのいうごとく、一つの描かれた弧線はその「引き張られたような」線の中に働く諸種の力の機械的活動の表象を生ぜしめることによつて、快感をわれわれに与える。それ故一つの弧線という単なる感性的・幾何学的所与性の中に、われわれは「緊張力のシステム」という非感性的なる本質の所与性の事<sup>フアクテイシユ</sup> 実<sup>ユ</sup> 的表出を得たことになる。われわれには引きぼしられた弓において緊張の経験をうるが、

この弓の表象と弧線との間に一種の親近性があつて、これが両者の類比的把握<sup>アナロジー</sup>を根拠づけ、緊張という同じ本質を所与性にもち来たすことを可能にしたのであるが、ここに対象的代表作用の基礎があるという。しかしゲーテの立場からいえば、一つの弧線が *Bedeutung* をもつ可能性は、「緊張」という唯一の理念的内容のゆえのみならず、流動性、海の大波のごとき内部からの高まり、ロマネスク的内的世界のリズム、あるいは仏教における水等々の表象としても存在する。われわれ一人一人のもつ固有の立場はこれらの弧線の側面と必然的に結合する。われわれは弧線の美的観照に際して弧線の類比関係を *bildhaft* に、いわば *meditativ* に把握し、それによつてこれをわれわれ自身の生に対して必然的關係をもつものとする事ができなければならぬ。以上の両者の対立はより複雑な対象に際してより明かとなる。たとえばパリという都会はメッカウアーにとつて、パリそのものという唯一つの *eidetisch* な核心をもつてゐるわけであるが、この核心は芸術家の魂の中にのみ存在する伝達不可能なものであるため、これを表現しようとするあらゆる試みは、表現が必然的にかかわり合う物質の *faktisch* な所与性のために蹉跌せざるをえない。したがつてここに無数の新たななるパリの美的イデーが無数の作品となつてこの「核心」のまわりに群集するといふのである。一方ゲーテによれば、芸術の領域では永遠に表現不可能なパリの *eidetisch* な核心のごときものはそもそもありえない。なぜなら或る対象の *Bedeutung* は主観の個性との必然的関連において多様な仕方でのみ生じるのであつて、この関連を無視してあらゆる主観にとつて共通であるべき唯一の核心というがごときを想定することはできないからである。メッカウアーもゲーテもアナロギーを重視するが、前者にとつて個々の芸術作品と唯一の *eidetisch* な核心との間のアナロギー（対象的代表作用）が重要であるに対し、後者にとつては芸術によつてよびおこされる心的活動の法則性と自然の隠れた法則性との間のそれが重要なのである。<sup>(註43)</sup>

この両者の立場の相違は結局、芸術がイデーを形象の中に可視的にすると考える観念論美学の伝統的立場と異なり、ゲーテが、現象をばイデアールな、合法的な形式の中に示すところに芸術の本質を考えていたことに基いている。芸術の本質を徹底して仮象の中に見、しかも美と真との統一を求めた以上のゲーテの立場は現代の美学にも通じる或る基本的な問題点を含んでいるのではないであろうか。

- 註1 *Einwirkung der neueren Philosophie*, 1817. *Goethes Philosophie aus seinen Werken*, S. 277.
- 註2 たとえば「詩と真実」第三部第十四章や一七九八年四月二十七日附シラーの書簡への返信草案など。
- 註3 N. v. Bubnoff, *Goethe und die Philosophie seiner Zeit*, in *Zeitschrift f. phil. Forschung*, 1947 344-46 W. Danckert, Goethe, 1951. S. 228.
- 註4 *Erste Bekanntschaft mit Schiller*.
- 註5 G. Simmel, *Kant und Goethe*, 1916. (谷川訳) 一八一—二四頁。
- 註6 *Weimarer Ausgabe*, I, 5, S. 275. vgl. Danckert, S. 263.
- 註7 *Weimarer Ausgabe*, II, 11, S. 164. vgl. Danckert, S. 263.
- 註8 Fr. Strich, *Deutsche Klassik und Romanik*, 1922. (虎沢訳) 九三—一四頁、一〇二頁。
- 註9 Referat über J.D. Vaucher; *Histoire Physiologique des Plantes de l'Europe*, 1830. vgl. Danckert, S. 241.
- 註10 フックレンマンとの対話、一八二七年四月一日
- 註11 同、一八二七年七月五日
- 註12 Referat über die "Kurze Vorstellung der Kantischen Philosophie" von F.V. Reinhard, 1819. *Weimarer Ausgabe*, IV, 27, S. 309. vgl. Danckert, S. 256 f.
- 註13 An Knebel, 21. Februar 1821, *Weimarer Ausgabe* IV, S. 136 f. vgl. Danckert S. 257.
- 註14 N. v. Bubnoff, *Goethe und die Philosophie seiner Zeit*, in *Zeitschrift für philos. Forschung*, 1947. S. 290.

註15 Goethes Philosophie aus seinen Werken, hrg. von M. Heynacher S. 289 f.

註16 Vgl. Danckert, S. 259.

註17 Ed. May, Erkenntnistheoretische und methodologische Betrachtungen zur Naturforschung Goethes, in Zeitschrift für philos. Forschung, 1949.

註18 W. Dilthey, Erlebnis und Dichtung, 1905 (柴田訳) 二八八頁。

註19 同二三三頁。

註20 Kritik der reinen Vernunft, B, 104.

註21 Bedeutende Förderer durch ein einziges geistreiches Wort, 1823. Goethes Philosophie aus seinen Werken, S. 292 f. なおこの論文でゲーテは、彼の文学一般を「対象的文学」とよぶことができるとし、「さて私の対象的思惟について

いわれたことを私は『対象的文学』についても関係づけたい。私には偉大な一定のテーマ、伝説、太古からの伝承が深く心にしみこんでいるので、四十年、五十年の間、いきいきと心の中に維持されていた。私にはこのような貴重な形象がしばしば構想力において新たな形で現れてくるのが何よりの美しい所有物であると思われた。それらは実に常に姿を変えながらも、より純粹な形、より決定的表現へと自己の本質を変化させることなく成熟していったから。」と、あの花の形象と同様の体験を語り、更に「導き出すこと」の遂にできなかった場合として、フランス革命をあげ、「庶出の娘」が多年心に深くきざまれながら文学に結晶できなかったことを述べている。なお、対象的思惟を「意味」をもつ思惟と考えることによつて、これがたとえバランガーのいう「内含的シンボル」による思惟＝芸術的思惟と類似の構造をもつものであることがわかる。

Vgl. S. K. Langer. Philosophy in a new key, 1951. (矢野ら訳) 二五二頁以下。

註22 Bedeutende Förderer, a. a. O. S. 209.

註23 Einwirkung der neuern Philosophie, a. a. O. S. 278 f.

註24 一七九四年八月二十四日附書簡

註25 Die Metamorphose der Pflanzen, 1790, Goethes Philosophie aus seinen Werken, S. 87.

註26 C. G. Carus, Goethe, 1843.

註27 Danckert, S. 260 f. 以下は、一七八七年八月十二日、一七九〇年十一月一日附ケルナー宛書簡に見られるように、シラ

対象的思惟とゲーテの古典主義的芸術観の成立

一は一七九〇年代のはじめにはゲーテの思想に対してまだ懐疑的であった。

註28 Anschauende Urteilskraft, 1817, Goethes Philosophie aus seinen Werken, S. 284.

註29 イタリー紀行' 一七八七年九月六日

註30 C. Ph. Moritz, Über die bildende Nachahmung des Schönen, 1788. イタリー紀行(相良訳)ト三三九頁以下。

Vgl. H. Nohl, Die ästhetische Wirklichkeit, 1935, S. 101 ff.

註31 Goethe, Über die bildende Nachahmung des Schönen von C. Ph. Moritz, 1789, in Schriften zur Kunst, Artemis, S. 71.

註32 相良訳三四〇頁。

註33 Einfache Nachahmung der Natur, Manier, Stil, 1789, in Schriften zur Kunst, S. 66 ff.

註34 A. a. O. S. 68.

註35 ショアッコ(角訳)七四頁。

註36 Der Versuch als Vermittler von Objekt und Subjekt, 1792, Goethes Philosophie aus seinen Werken, S. 131 f.

註37 Winckelmann und sein Jahrhundert, 1805, Schriften zur Kunst, S. 422.

註38 A. a. O. S. 417. ちなみにグンドルフは「この論文において、ゲーテがヴィンケルマンの心術を述べる口実のもと、彼自身のそれを断章的な Glaubensartikel として記述した」としている。Gundolf, Goethe, 1916, S. 631.

註39 Hegel, Ästhetik, hrsg. von Lukács, S. 146.

註40 A. a. O. S. 108.

註41 W. Meckauer, Wesenhafte Kunst, 1920, S. 20 f.

註42 A. a. O. S. 36 f.

註43 ゲーテは普遍的なものの特異なものとの関係としてこの問題を考察している。「詩人が普遍的なもののために特異なものを求めるのと、特異なものの中に普遍的なものを観るのとは大変な違いである。……特異なものを生き生きと捉えるものは、同時に普遍的なものをも、それとは認めることなくして、あるいはあとになつてはじめて、持つのである」。〔箴言と反省〕。この場合ゲーテにとつて普遍的なものは、内容ではなく、形式として現れるのである。

Vgl. K. Viëter, Goethe, 1949, S. 544 ff. 和丹尼 Danckert, S. 320 ff.

对象的思惟とゲーテの古典主義的芸術観の成立